

## 平成10年度 内外研究報告

### ケルン大学音楽学研究所音響学研究室における在外研究

久保田清二

1998年7月から3ヶ月間ケルン大学音楽学研究所音響学研究室で、オルガンパイプの口径比と空間との関係について、研究いたしました。

この研究は、残響特性のほか、オルガンからの直接音と空間の影響を受けた、いくつかのサンプル音を収録し音響解析の後、統計を取り、その傾向を求め、新たな空間においてオルガン設置時の、より良い音場を再現することにあります。そのために、数多くのサンプルの収集が決め手になります。サンプルの収集と音響解析の方法を確立し、そのメソッドに沿って進めて行くことが、大変重要です。サンプルの収集方法については、Dr. Fricke の助言に沿って行い、音響解析の方法については、Dr. Reuter の指導を受けました。

8月にはいて、1720年～1750年の間に製作されたオルガンで、名器といわれる、それぞれ傾向の違う、北ドイツ(Stade)、南ドイツ(Ottobeuren)、東北ドイツ(旧東ドイツ)(Trebel, Gatow)、と現代の楽器(Hannover, Er-srode)の計6台のサンプル収集を行いました。各々の楽器は、有名なので、絶えず観光客が多く、また、収録の際のノイズの問題もあり、夜中の2時から明け方5時にかけての資料収集になりました。事前のスケジュールの打ち合わせも大変でしたが、研究所の助けもありまた、各教会およびオルガニストの協力もあって、つつがなく終了いたしました。9月初めから帰国時まで、音響解析を行いました。

これから、逐次、数多くの資料収集が進み、その解析結果の比較も進ん

で、ある方向が見えてくると思われます。そのとき、途中結果を発表する予定です。

※資料収集にあたり下記の各氏の多大な御援助をいただきました。

フリッケ博士(J. Fricke)、Ottobeuren ではオルガニストのミルチツキー(J. Miltschitzky) 氏、Stade ではオルガニストのベーレント(A. Behreds) 氏および牧師ゴロン(P. Golon) 氏 Trebel, Gatwo, Ersrode ではオルガン製作家ボッシュ(M. Bosch) 氏、Hannover ではオルガニストのグリースハンマー(W. Griefßhammer) 氏

## 内外研修員受託に係る研修報告 ——「平安末期の物語の研究」を中心に——

中西 健治

1998年4月より1年間、立命館大学文学部にて研修をした。その課題は、「平安末期の物語の研究」であった。指導教授は立命館大学教授 伴 利昭氏。委託研修員として受け入れて頂き、立命館学園の諸施設を十分に活用させてもらい、また多くの教職員からも多大な指導及び助力を受ける事ができて、所期の目的は一応果たせたのではないかと思う。以下、本学園に提出した報告書のうち、「Ⅱ (a) 研修報告」のみを抄出する。

### Ⅱ (a) 研修報告

- \* 研修課題「平安末期の物語の研究」に即して、特に「浜松中納言物語」の注釈原稿の作成に多くの時間を割いた。原稿は巻二～巻五までを執筆終了。残りの巻一と論考、解題等の原稿を完成させる予定である。まだ再検討や調整がかなり必要ではあるが、近いうちに刊行(『浜松中納言物語の研究 論考と注解』<仮書名>)する予定にしている。
- \* 立命館大学と凸版印刷との産学協同事業である「源氏物語サイバー研究所」構築プロジェクトチームの一員となり、源氏物語研

究の成果をインターネットで公開したり、物語体験館の構築等を設営する研究活動に従事した。その一部は、昨夏、京都文化博物館と日本経済新聞社共催で開催された「源氏おんな物語展」（1998・8・2-1998・9・20）で公開され好評を博した（別添・日本経済新聞の記事を付した。省略）。この事業は今年度で終了するが、引き続き研究活動を展開する。なお、凸版印刷の事業報告書に掲載予定の所感を添付した（省略）。

- \* 上記のプロジェクトチームで参加したもう一つのイベントである「エデュテイメントフォーラム '99」（本フォーラム '99京都実行委員会主催・文部省・通商産業省・郵政省・NHK京都放送局・朝日新聞社・毎日新聞社など後援）では、「バーチャル体験！源氏物語の世界」（伴 教授担当）の構成とシナリオを執筆。遠隔講義（立命館大学・衣笠キャンパス→京都市サーチパーク）の実際を体験することができた。（1999・3・25-3・27）そのポスターを複写、添付しておく（省略）。
- \* 上記プロジェクトチームの研究成果の一つとして「源氏物語データベース（本文編）」がある。稿者もこの作成に従事した。

以上